淡路地域未来フォーラム　議事録

日　時：令和３年１１月１２日（金）１６：３０～１７：３０
場　所：オンライン
参加者：地域で活躍されている方　１２名
　　齋藤知事・亀井県民局長・吉野室長・事務局（大橋・福榮・正司）

・主な内容

（齋藤知事開会挨拶）

2025 年には大阪・関西万博があり、先日、大阪と神戸と淡路を結ぶクルージングの実証実験を行った。今後、水上交通の可能性を見いだしていき、淡路をこれまで以上に盛り上げていきたい。また、淡路が直面する地場産業や後継者不足などの現状の課題をどうしていくか考えていきたい。

今日は、様々な意見を聞けることを楽しみにしている。新ビジョン策定に向けて、20～30 年後の兵庫の未来について、自由に発言いただきたい。

～以下意見交換内容～

（山本益嗣）

6 年前に U ターンで淡路に戻ってきた。帰ってきて驚いたことは、人口が減少していること、公共交通機関が壊滅していること、地域の共同体が衰退しているということ。

現在は、城下町洲本再生委員会というボランティア団体で、洲本城下町を活性化するために活動している。具体的には、空き家を改修して、若者に移住してもらって商売をしてもらう活動や、春と秋にレトロな町歩きというイベントを実施している。コロナ前は島外から 1 万人ぐらい来るイベントだった。

また、寄合外町という移住促進の活動もしている。半径 2 キロ以内に商業施設・病院・銀行などがあり、洲本を移住の窓口として移住促進のための活動をしている。

将来を考えると、淡路島の人口はどんどん減少している。具体的な解決策は、「コンパクトシティ」しかないと思う。

（富田祐介）

10 年前に淡路島に来た。主に企画コンサルの仕事をしている。

洲本の城下町で、ワーケーションの拠点として活動している。個人の働き方を変えようという中で、都会の企業さんにワーケーションを利用してもらう取組を行っている。

ワーケーションを利用してもらうだけでなく、淡路島で事業をしてもらおうと、市役所や銀行にも支援してもらって、地元に根付いてもらう取組も実施している。

また、インバウンドについても積極的に案内している。ファムトリップ等を主催して、2025 年万博に向けて、特に食に関して PR していきたい。

（赤松清子）
交流人口・関係人口増加に向けた取組を行っている。また、2015 年から、淡路暮らし総合相談窓口として、移住相談業務を行っている。その中で、コロナ禍で、移住相談者の層に変化が起きている。これまでは、自営業や企業さんからの相談が多かったが、コロナ後は、子育て世代からの相談が増えた。田舎でのびのび子育てをしたいという相談が目立つ。
その希望を叶えるためには、私は、淡路島における雇用の促進が必要であると考えている。地元企業の活性化はもとより、多種多様な業種の働く場の創出が必要だと業務の中で感じている。
また、年間所得の増加も欠かせない。関西の平均年間所得は約 390 万。淡路島の平均は、３市ともに 280 万程度で、かなり下回っている。これを改善されることで、若者の島外への流出が収まり、移住促進に繋がると思う。

～３者と知事との意見交換～
（齋藤知事→富田祐介）
ワーケーションは仕組みとして受け入れなどは実際動いているのか。
（富田祐介）
個人の方と東京２社、大阪１社の法人さんが入ってきている。
コンソーシアムも動いている。
（齋藤知事）
ワーケーションはどんどんやっていきたいと思っている。
ワーケーション知事室も来週から北播磨で実施する予定。
働くことに加えて、東京などから来ている方に、地域に根ざしていくための仕掛けが必要だと思う。そういう取組はやっているのか。
（富田祐介）
洲本の城下町は、飲食店がたくさんある。洲本は夜になっても、お店が開いているし、歩いて過ごせ、お店の人とも仲良くなることでリピーターも増えている。交流を通して地域に根付いてもらえるよう積極的に人を繋ぐサービスを行っている。
（齋藤知事）
ファムトリップとは実際どういうものか。
（富田祐介）
ファムトリップは、旅行会社様向けツアー。専門の旅行に関係する有識者を集めて、淡路島を見てもらって販売につなげたり、アイデアをもらってブラッシュアップしたりするツアーである。
（齋藤知事）
兵庫県としても、2025 年万博に向けて、県内各地でミニツアーを展開し、地場産業や農林水産業の取組を見てもらえたらと思っている。また色々教えて ほしい。

（辻淳三）

普段は、自宅周辺の里山の整備・放置竹林の整備を主に実施している。整備しようと思ったきっかけは、10 年前に自宅に薪ストーブを設置したこと。里山整備で間伐した広葉樹を薪や炭などに加工したり、放置竹林で伐採した竹を竹チップなどに加工したりして、資源の循環を行っている。

また、妻が代表している「淡路里山プロジェクト」では、春先に伸びたタケノコを使って、メンマ造りをしている。メンマの 99%は中国産で輸入に頼っている。しかし、ここでとれたメンマは輸入品と違ってシャキシャキしている。メンマを通して「食べる竹林整備」で繋がっていく。里山整備することで、自然災害の軽減・獣害被害の軽減ができ、海も元気になる。

補助金に頼らず、山から海へ資源の循環・経済の循環ができる仕組み作りをしていきたい。

（正木光）

生まれも育ちも南あわじ市で、2014 年に就農して、2017 年に独立した。日本農業遺産に認定されたことから、南あわじ市の農業の活性化を図るために農業イベントを開催しようと考えている。農業女子仲間と計画して、市に提案している段階。南あわじ市の顔になるようなイベントを開催したいと考えている。

（安部則行）

淡路島出身で、介護事業を実施している。日々感じていることは、今後少子高齢化になるなかで重要なのは古き良き時代のコミュニティづくりだということ。知的障害や身体障害の方の親御さんは、子供一人にさせることの不安を口にしている。その中で、2005 年から地域包括ケアシステムという取組があり、私も実施し、広めている。

一番大切なのは、互助だと思う。ご近所つき合いを構築していく必要があるが、近年若い世帯になっているので、そのつなぎ役を我々がやっていく必要がある。地域だけに頼るのではなく、みんなで助ける仕組みが必要だと思う。

～３者と知事と意見交換～

（齋藤知事→辻淳三）

補助金に頼らない取組ということが印象的だった。補助金に頼らない選択をした思いを聞かせてほしい。

（辻淳三）

補助金に頼っているとやり方に詰まることがある。

今は、竹林整備をして、竹チップを使ってくれる農家の方と労力の交換や、牡蠣の養殖筏に竹チップを使ってもらってお金の流れを作ったりしている。

（斎藤知事）

立ち上げの段階で補助に頼らないでやれる可能性があるのか。

（辻淳三）

立ち上げの段階では、補助金で機械の購入とかは買わせてもらった。それ以降は、補助金なしで実施している。

（斎藤知事→正木光）
農業女子仲間は何人ぐらいいるのか。
（正木光）
南あわじ市の農業女子は、14・15 人ぐらい。一緒に活動することはほとんどないが、せっかく南あわじ市が日本農業遺産に登録されたので、活性化させるために動いている人が多いので、一緒に話しあいはしている。ただ、コロナがあって、大きなイベントを開催しようという動きはまだない。今は、マルシェなどに出店してそれぞれで動いている。
（齋藤知事→安部則行）
コミュニティづくりについては、日本でも指摘されている課題。介護保険などの補助に頼らない、地域のつなぎ役が出来るような、社会システムとして動くためにどうしたらいいか。
（安部則行）
特別支援学校の PTA は、連合 PTA の参加がなく、親御さん同士の繋がりが少ないのが大きな問題。高齢者については、行政も含めてサポートする必要がある。今、私の会社では、デイサービスに来られている方が職員とスマホでいつでも相談出来るように、ドコモショップと連携して進めている。

（加藤里帆）
横浜出身で、新入社員の配属で淡路島に来た。今後は、教育や人材育成の実践の場として淡路島を盛り上げていきたい。
教育に関しては、毎週、小中学生からシニアに向けて SDG s などの研修を実施している。今後外国人や移住者向けの研修も今後行っていきたい。
また、子育て世代の移住促進に向けて、インターナショナルスクールの誘致や、サテライトなどを誘致できたらと思っている。また、万博がおわってからも万博のレガシーを残していけるような取組ができればと思っている。
（サリー）
淡路島に移住してから、地域おこし協力隊と藍染め工房を経営している。
子供の将来を考える上で心配なことは、温暖化と女性の管理職・リーダーの少なさである。
温暖化については、企業や政府が、積極的に対策を講じていく必要がある。また、スーパーなどでのマイクロプラスチックの使用は、他国に比べて多すぎると思う。また、女性も活躍できる場をもっと設けるべきだ。

～２者と知事との意見交換～
（齋藤知事→加藤里帆）
魅力の発信をどうしていくか考えることは重要なこと。兵庫県としても、万博後もレガシーとして取り組んでいきたい。インターナショナルスクールについても淡路に出来れば面白い。

（齋藤知事→サリー）
女性の活躍の場の環境作りはしっかりやっていきたい。
具体的には、県庁の中でも、管理職や、マネージャークラスの女性をもっと増やしていきたいと考えている。
普段のアートについても聞いてみたい。
（サリー）
洲本まちおこし協力隊で、壁画を描いている。写真スポットとして、大浜海岸の壁に、洲本高校の美術部と一緒に絵を描いている。
（齋藤知事）
すごくおもしろい取組だと思う。
兵庫県としても、ソフト分野を世界にもっと広めていきたいと考えている。非言語で発信できるものをもっと創っていき、クリエーターの方とコラボレーションして、映像を通して兵庫県の地域の素材を世界に向けて発信していきたいと思っている。サリーさんをはじめとした外から来られたクリエーターの方たちとコラボして発信していけるようなプラットホームを創っていきたい。

（木下紘二）
洲本と南あわじでホテルを経営している。コロナで去年から客足が減っていたが、１０月１日以降の緊急事態宣言解除と県民割のおかけで、本日は福良港にある宿が満室になった。
普段は、第一次産業の方とサクラマスや 3 年とらふぐの開発プロジェクトに携わっている。
将来は、渦潮世界遺産登録をめざしたり、大鳴門橋架橋の下を自転車が通れたりできるような素晴らしい取組を首都圏や全国の方にしっかり PR していきたい。
インバウンドについては、正直淡路島は非常に遅れている。ホテルニュー淡路グループとしても、インバウンドは１％ぐらいしかない。
２０２５年に向けて、公共交通の課題を克服しながら、観光に力を入れていきたい。
夜のライトアップ事業も福良で計画している。宿泊場所として、海外から来てもらえるように取り組んでいきたい。
（森下さなえ）
大野から由良に嫁いできた。由良の地域の方々と地域の活性化のために様々な活動をしてきた。地域の方と活動する中で、由良を淡路の目玉となる観光地にするのが私の今のビジョン。先日、現役高校生が由良で漁師をしたいとの相談を受けた。私もできるだけ協力をしたいと思っている。
（村田泰志）
一般廃棄物処理業を経営している。主に一般廃棄物から出るゴミを回収するのが私の仕事だが、ゴミ収集の視点から、持続可能な循環社会に貢献出来ることはないかと日々考えている。そこで、ホテルや給食センターから出る食品残渣を拡販発酵させ、堆肥化する事業に挑戦したいと思っている。その堆肥で玉ねぎなどを作り、給食セン

ターやホテルに配ることが出来れば脱炭素に貢献出来るのではないかと考えている。

～３者と知事と意見交換～

（齋藤知事→木下紘二）

インバウンドの課題の中で、交通は大きな問題だと思う。なにか工夫とかやられているか。

（木下紘二）

１２月中旬に徳島空港と陸の港西淡を結ぶバスが実験的に２ヶ月間運航する予定。また、昨年度から京都駅から四国に行くバスが洲本インターチェンジの　　バス停に停まるようになった。

また、JR なんば駅から伊丹空港などを経由して、洲本温泉までバスが運行されるようになった。少しずつ、公共交通が増えてきている。

１日４００本ぐらい四国に行っているバスを、その何本かが淡路に停まるようになれば、もっとアクセスがカバー出来るようになると思う。

（齋藤知事）

一次交通は出来つつあるが、問題は、島内に着いてからの２次交通だと思う。

インバウンドは個人で行きたいところに行きたがる人が多いので、そこをどういう風に解決していくかが課題だ。

私は、フィールドパビリオンを万博でやりたいと思っている。万博でインバウンドに淡路島に来てくれた人に現場を紹介し、観光客にローカルイベント等に参加してもらえるきっかけ作りを行いたい。その中で課題になるのがやはり移動手段。

（木下紘二）

淡路島にいってみたいと思うような魅力作りと、交通の問題の両方から考えていきたい。

（斎藤知事まとめ）

私は、淡路に休日やってきたときに、どこにどういうイベントが実施しているのか一覧できるものがあればおもしろいなと思っている。イベントを一覧できる仕掛け作りがあれば、各地域のローカルイベントや地場産業・ワーケーションなどのいろんな取組をフィールドパビリオンとして発信できる。それを万博でいかせれば面白い。ポケトークなどの技術を活用して多言語も活用すれば、言語の壁も防げるのでは。

万博に来た国内外の人が自由に参加したいイベントをチョイスできる、そんなことをこれからできれば。裾野が広い取組だが、行政からいろんな企業が自発的にやろうという動きを作ることが重要。いろんなところで投げかけていきたい。

本日参加頂いた皆さんが日常で取り組んでいることも、実は、世界から見るといつかどの国でも直面する課題への取組である。その解決策の最先端としてのモデルを淡路から発信できれば。